発達部門（成人・老人）

成人期・老年期における発達研究の動向

西田 裕紀子

（国立長寿医療研究センター）

Review of Recent Studies on Psychological Development in Adulthood and Old Age

Yukiko NISHITA

(NATIONAL CENTER FOR GERIATRICS AND GERONTOLOGY)

This study reviewed recent research on psychological development in adulthood and old age, published between July 2012 and June 2013 in Japan. The results of the studies were classified into the following five categories, based on their subject : (1) child-rearing and experience as parents, (2) marital relationships, (3) psychological development and well-being of the elderly, (4) cognitive functions and intelligence, and (5) others. Through reviewing the studies, discussion addressed new findings and suggestions regarding studies on life-span development and future problems. Through these discussions, the following general tendencies were identified : the number of papers regarding psychological development in adulthood and old age was not very high. However, publications on marital relationships, which have been little investigated to date, and publications on psychological development of the elderly, for which there is a growing social demand, have increased. Research conducted this year makes a significant contribution to the progress of Japanese life-span development studies. Lastly, difficulties and importance of studies on development in adulthood and old age, as well as future prospects are discussed.

Key Words : life-span development, adulthood, old age

本稿では、2012年7月から2013年6月の1年間に日本で公表された、成人期・老年期の発達に関心をもつ心理学研究の動向を展望した。まず、研究の成果を「育児・親としての経験」、「夫婦関係」、「高齢者の心的発達・well-being」、「認知機能・知能」、「その他」の5つのテーマに分類して概観し、個々の研究に関して、新しい発見や生涯発達研究への示唆、今後の課題について論じた。それらの結果から、以下の全体的な傾向が指摘された。まず、成人期・老年期の心理的発達に関する論文の数は、例年と同様に多くはなかった。しかしながら、これまで研究が少ないと指摘されてきた夫婦の関係性に関する論文や、高齢化にともなって社会的な要請の強い高齢者の心的発達・well-beingに関する論文などが積極的に発表されており、この1年間の研究成果は、我が国の生涯発達研究の今後の進展に貢献するものと考えられた。最後に、成人期・老年期の発達研究の重要性と難しさ、今後の展望を議論した。

キーワード：生涯発達，成人期，老年期

はじめに

本稿では、過去1年間に発表された、成人期と老年期の発達研究の動向を展望する。対象とした学術誌は、2012年7月から2013年6月末までに公刊された『教育心理学研究』『心理学研究』『発達心理学研究』『老年社会科学』、学会発表は『日本教育心理学会第55回総会発表論文集(2013年度)』である。該当する論文数は多くなかったため、特定の問題を選択して深く掘り下げるといよりは、生涯発達研究の最近の進展に関して、全体的な傾向を把握することを方針とした。

成人期・老年期の発達に関連する学術論文を概観すると(Figure), 成人を対象とした研究では、子育てや親としての経験に関するもの、夫婦間の相互関係や夫婦関係の捉え方に関するものが充実していた。一方、高齢者を対象とした研究は心的発達に関するものが中心であり、身体機能や生活機能が低下した場合の心理的な適応に関する貴重な成果も報告されていた。更に、成人期から老年期にかけての認知機能や知能の発達に関しても、重要なデータが蓄積されていた。

本稿では、以上の4テーマ、すなわち「育児・親としての経験」、「夫婦関係」、「高齢者の心的発達・well-being」、「認知機能・知能」に関しての研究成果を整理し、発達研究への示唆や今後の展望について議論する。次に、これらのテーマに該当しなかった学術論文と学会発表に関して、「その他・学会発表」として概観する。最後に、成人期・老年期の発達研究の重要性と難しさ、今後の展望について議論する。

育児・親としての経験

子育てや親としての経験に関する論文は4編で、20代後半～30代(子どもが乳幼児期)の父親、母親を対象とした2編では、仕事と家庭生活の組み合わせ等、多様なライフスタイルの心理的な意味が問われていた。一方、50代～60代前半(子どもが成人初期)の母親を対象とした1編は、子育て経験の主観的な振り返りから親としての成長を記述しており、各々、ライフステージの発達の特徴を反映する内容であった。更に1編では、障害のある子どもをもつ親のストレスを取り上げており、臨床的応用への示唆に加えて、多様な親経験のあり方を明らかにするという点においても、重要な成果であった。

ライフスタイルと子育て

昨今の女性の生き方の多様化に伴って、女性の生活スタイルと適応や精神的健康との関連については、多

くの研究が蓄積されてきた。一方、男性は職業人として、あるいは家族を扶養する責任の担い手として扱われることが大半であり、研究上、男性の家庭関与はあくまでも「妻のサポート」として取り上げられることが多かった。大野(2012)は、仕事と家庭のバランスは、男性自身の適応や精神的健康を考える際にも重要であると指摘し、育児期の男性にとっての家庭関与の心理的な意味について検討している。分析の対象は、3～4歳の子どもをもつ男性332人(平均年齢35.92歳, $SD=4.44$)であった。まず、職業生活と家庭生活にエネルギーを配分するバランスから、男性の生活スタイルとして、仕事を生活の最優先とする2タイプ(「仕事+余暇型」・「仕事中心型」)と、仕事と家庭に同等のエネルギーを傾注する「仕事=家庭型」の下位分類2タイプ(「二重基準型」・「平等志向型」)を抽出した。これらの4タイプについて、生き方満足度に対する影響要因を検討したところ、男性の家庭関与は各タイプで異なった心理的意味をもつことが示された。例えば、「仕事中心型」では、休日に育児にかかわる余裕のあることが生き方満足度と関連しており、「平等志向型」では、男性自身の家事分担率の高さが生き方満足度を高くしていた。一方、「二重基準型」では、妻が伝統的な性別役割分業に賛成である(妻自身の回答による)ことが男性の生き方満足度を高めることが示された。大野はこれまでも、男性の発達・適応に関して精力的に研究を重ねており(e.g., 大野, 2008), 男性の家庭関与や男性性役割規範の議論は、夫婦関係や労働環境など、広い文脈の中で捉える必要があるという考察には説得力がある。

一方、女性のライフコースの多様化と子育て感情との関連に改めて着目する論文もあった。宮本(2013)は、「子育てをしたい」と同時に「自分の生き方を大切にしたい」という母親の葛藤に着目し、育児不安に影響を及ぼす要因として、自らの生き方や将来を自分で決めることができるという自己決定感を取り上げている。そして、ライフコース(就業継続型・再就職型・専業主婦型・再就職希望型)別に、母親の自己決定感が時間的展望を介して、育児不安に影響を及ぼすという仮説について検討を行った。分析の対象は、0～6歳の子どもをもつ母親1,726名(平均年齢=34.20歳, $SD=5.48$)であった。重回帰分析を行った結果、自己決定感は全ての場合に育児不安を軽減する訳ではないことが示された。専業主婦型や再就職型では自己決定感が育児不安を軽減していた。しかしながら、就業継続型や再就職希望型では、自己決定感が逆に育児から離れて一人に

Figure 本稿で対象とした学術論文

注) 論文の情報に基づき、研究対象の年齢を実線 (平均±1SD)、破線 (年齢範囲) で示す。なお、父親・母親、中年者・高齢者などに分けて年齢の記載がある場合は、各々を複数の線で示した。

なりたという願望や、疲労感を高める可能性が示唆された。著者はこの結果に関して、自分で決定する反面、一人で子育てを背負ってしまっているからではないか、と興味深い考察をしている。しかしながら、今回の仮説が、共分散構造分析モデルでは十分な適合を示さなかったことには注意が必要であろう。例えば、次項の夫婦関係に関する文献 (伊藤・相良, 2012a; 黒澤・加藤, 2013) でも示されるように、配偶者と相互に考えを調整し合ったり、配偶者の気持ちを分かろうと努めたりすることもまた、心理的に重要であると考えれば、自己決定感の例として挙げられている項目「夫の考えにこだわらずに自分の考えどおりにしている」に対して高得点を示すことが、必ずしもポジティブであるとは限らないように思われる。本研究で精力的に収集された大規模データは、女性の多様で複雑なライフスタイルを検討する際には、大変貴重である。著者も記し

ているとおり、今後、更に、自己決定を取り巻く文脈を考慮に入れた成果を期待したい。

親としての成長

「親となること」により、人格の様々な側面が成長することを示す先駆的な論文 (柏木・若松, 1994) が発表されて以降、親経験の心理的な意味について関心が高まっている。大島 (2013) は、母親がどのような経験をしながら成長していくかについて質的に検討している。20代から30代前半の子どもをもつ中年期の母親22名 (52~62歳: 平均年齢56.05歳, SD=3.48) に対して、子育ての主観的体験に関する半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。その結果、(a)母親はどんなに子に良かれと思って関わっていても失敗することがあり、その失敗の背景には「子育てへの義務感」がある場合が多いこと、(b)このような失敗を乗り越え、母親の成長を

促進する上で、「子から学ぶ」体験が重要な役割を果たしていること、(c)「心理的ゆとり」だけではなく、「離れて見守る」ことができるようになることも、母親としての成長であることを見出している。論文に示された概念の関係を示す図やストーリーラインには、子育てという複雑で多様な主観的経験とその因果関係が説得的に整理されており、グラウンデッド・セオリー・アプローチの有用性が十分に生かされた内容であった。また、本研究では、子育てを振り返り、再評価する時期にあたる中年期の母親に対して、成人初期の著者が子育てについて教えてもらうという形式でインタビューを行っている。抽出された個々の対象者の語りは、そのような聞き手と語り手における生き生きとした相互作用を感じ取ることのできる、魅力的なものであった。著者も指摘するように、本研究は仮説生成段階にある。今後は、量的データを用いた仮説の検証が期待される。

発達障害児・者をもつ親の経験

発達障害児・者をもつ親は、子どもの育てにくさや障害特有の問題に直面することにより、養育における様々な困難を経験しやすい。山根 (2013) は、幅広い年齢の発達障害児・者をもつ母親 255 名 (平均年齢 44.98 歳, $SD=6.30$) を対象に、ストレッサーを評価する尺度を作成している。まず、項目の因子分析を行った結果、「理解・対応の困難 (子どもの気持ちの変化についていけないことがあった等)」、「将来・自立への不安 (子どもが大人になったときに、独り立ちできないのではないかと考えた等)」、「周囲の理解のなさ (子どもの不思議な行動を見て、周囲の人からしつけや教育をしていないと思われた等)」、「障害認識の葛藤 (子どものいいところに目を向けたいが、できないところばかり目についた等)」の 4 因子が抽出され、十分な内的整合性が確認された。更に、ソーシャルサポートがストレッサーを媒介して心理的ストレス反応を低減させるという仮説モデルを検討した結果、ソーシャルサポートはストレッサーを低下させることで、心理的ストレス反応を低減させることが示された。本研究に先立って、山根 (2012) では、「障害のある子どもをもつ親」としての経験を自らの人生にどう意味づけているかを質的に検討している。親としての経験の意味をより包括的・長期的に捉える視点を持ち合わせながら、本研究の尺度を活用し、その時々親が抱える具体的なストレッサーの様相や、支援・介入による効果に関する具体的な検討を進めることは、発達障害児・者をもつ親の発達や支援を考える際に、重要な示唆を提供するものと期待される。

夫婦関係

夫婦関係の捉え方や夫婦間の相互関係に関する論文は 4 編であった。2 編は、異なる発達段階の夫婦関係の捉え方について検討しており、子育て期の夫婦のストレス場面を想定したコーピングの尺度と、子育てをほぼ終えた中高年期夫婦の愛情を測定する尺度が作成された。一方、夫婦のペアデータを用いて、夫婦間の具体的な相互作用について検討した論文が 2 編あり、互いの価値観の差異が夫婦関係に影響することや、青年期の恋愛関係と比較した夫婦間の相互関係の特徴が明らかにされている。いずれも、本邦の夫婦に関する実証研究 (これまで不足していると指摘されてきた) の発展に寄与する貴重な成果であり、構築された尺度の活用に関しては、発達の変化やその規定要因に関する今後の展開が待たれる。

夫婦関係の尺度

黒澤・加藤 (2013) は、主に幼児を育てる親 117 名 (父親 53 名, 母親 64 名: 平均年齢 35.82 歳, $SD=5.05$) を対象に、夫婦間のストレス場面における関係焦点型コーピングの尺度を作成した。先行研究を邦訳、改訂した項目に対して因子分析を行った結果、「回避的關係維持 (緊張が落ち着くまで、関わり合わないようにする等)」、「積極的關係維持 (配偶者が何かに困っているときに、話しあってみようとする等)」、「我慢・譲歩的關係維持 (自分が不安を感じても、それを打ち消したり、相手に見せないようにする等)」の 3 因子を見出した。更に、妥当性の検証を通じて、「積極的關係維持」の適応性と「回避的關係維持」の不適応性が確認されている。一般的にコーピングの分類としては、問題焦点型・情動焦点型の 2 種類が用いられることが多く、本研究のように、夫婦間に生じるストレス場面を想定して、関係を維持する作用を含む関係焦点型コーピングを捉える尺度の作成は本邦では初めてであるという。子育て期には、育児方針で対立したり、子どもが発熱し予定を調節しなければならなくなったりと、多くのストレス場面に直面しやすいこと、そして夫婦関係は簡単には解消できないことを考慮すると、関係をやりくりしながら維持しようとする努力を含む関係焦点型コーピングは、夫婦の良好な関係を目指す際の重要な切り口となりそうである。夫婦関係の発達に伴って、関係焦点型コーピングのあり様も変化するのか、対象とするストレスの内容によって、関係焦点型コーピングの取り方が異なるのか、更なるデータの蓄積が求められる。

一方、伊藤・相良 (2012a) は、結婚生活を長く経た

夫婦の愛情関係に着目している。従来の夫婦関係に關する尺度には尺度構成やスコアリングの問題があると指摘し、夫婦関係を情緒面から捉える愛情尺度を作成して、信頼性と妥当性を検討している。調査対象は中高年者 914 名（女性 477 名、平均年齢 55.9 歳、 $SD=9.4$ ；男性 437 名、平均年齢 58.9 歳、 $SD=9.8$ ；平均結婚年数 29.5 年、 $SD=9.8$ ）、そのうち、分析対象者は配偶者が有る 888 名であった。主成分分析を行った結果、1 次元 16 項目（悩み事や相談があるとき、配偶者は親身になって一緒に考えてくれる等）の尺度として構成され、高い内的整合性が得られた。また、夫婦関係満足度、会話時間、配偶者の自己開示、夫婦の共同行動と正の相関、離婚願望と負の相関が得られたことから、尺度の妥当性が確認された。少子化、長寿化によって、子育てを終えた夫婦が二人で過ごす期間が長期化している現代において、中年期以降の夫婦のあり方が重要になっている。著者は、これまでも、日本の夫婦のコミュニケーションや夫婦関係と心理的健康に関する多くの重要な研究を蓄積しており（e.g., 伊藤・相良, 2012b）、愛情尺度で評価される中高年夫婦の情緒的関係がどのような心理的指標と関連するのか、どのような発達的な意味をもつのか、日本の夫婦のオリジナルな関係が存在するのか、本研究で収集されたペアデータの活用を含め、今後の研究の展開が待たれる。

夫婦間の相互作用

家族はシステムであり、家族成員の考え、信念、行動、態度などが常に相互作用しながら時間的に経過を重ねている。夫婦関係のあり方も同様であろう。江上（2013）は、父親、母親双方の「母性愛」信奉傾向とその交互作用が、夫婦関係満足度や養育態度に及ぼす影響について検討している。分析対象は、2～6 歳の子どもをもつ夫婦 304 組（父親の平均年齢 36.9 歳、 $SD=5.54$, 24～59 歳；母親の平均年齢 35.2 歳、 $SD=4.47$, 23～47 歳）であった。興味深いことに、母親の夫婦関係への満足度に対して、父親と母親の「母性愛」信奉傾向の高低の組み合わせが重要であることが認められた。すなわち、母親と父親の両方の「母性愛」信奉傾向が高い（父親も母親も、伝統的な性別役割に基づいた母親役割を信じている）場合には、母親の夫婦関係に対する満足度は高い。しかしながら、母親の「母性愛」信奉傾向が低く、父親の「母性愛」信奉傾向が高い（父親のみ、伝統的な性別役割に基づいた母親役割を信じている）場合には、夫婦間のコンフリクトが生じ、母親の夫婦関係に対する満足度が低くなる可能性が示された。なお、本研究では父母の養育態度に関しても検討しており、母親の夫婦関

係に対する満足度は子どもとのかかわりの積極性にも影響を及ぼす重要な心理的側面であることが示されている。

一方、金政（2012）は、中年期の夫婦関係と青年期の恋愛関係を比較し、相互の支援が関係満足度と精神的健康に及ぼす影響の過程に関する共通点と差異について検討している。対象は、青年期のカップル 104 組と中年期の夫婦 156 組（夫の平均年齢 52.01 歳、 $SD=5.15$ ；妻の平均年齢 49.03 歳、 $SD=4.67$ ）であった。青年期の恋愛関係と比較すると、中年期のより成熟した夫婦関係の構造が浮かび上がってきたことは興味深い。すなわち、中年期の夫婦関係では、本人の支援への期待に対応して、配偶者が支援やサポートを実際に提供しており、配偶者が支援を提供してくれていることを本人も認知しているという、相互に作用し合う構造が明確に示された。中年期の夫婦関係では、互いに相手の期待に沿って支援を提供し合っているという本研究の結果は、その関係の質の高さを示唆するものであると著者は考察している。もちろん、中年期の夫婦の相互関係には、大きな夫婦間の差がある。本研究の相互関係モデルが、夫婦関係の発達に伴って変化していくものなのか、あるいは、夫、妻各々の価値観や特性の影響を受けるものなのか、今後の研究の蓄積が期待される。

高齢者の心的発達・well-being

高齢者の心理的発達や QOL に関する論文は 6 編であった。3 編では、世代継承性や老年的超越、二次的コントロールの概念を検討することにより、高齢者の心的発達・適応に関する重要な成果を示した。また、2 編では、包括的な心理的 well-being としての Valuation of Life 尺度の作成、孤独感・ソーシャルサポートと精神的健康との関連の検討という高齢者の well-being の捉え方やその関連要因に関する報告があり、1 編では、虚弱高齢者の well-being を維持するための介入効果を検討していた。いずれも高齢期が長期化する現状を念頭においており、高齢者がどのように身体機能の低下や健康の衰退に適応しながら発達していくかについて、多側面から検討するものであった。本年の研究成果を基盤に、今後、後期高齢者、超高齢者を対象とする研究が大いに期待される。

心的発達

世代継承性（generativity）の概念は、Erikson の漸成的発達図式において、中年期の心理社会的適応課題として提唱された。その後の議論では、老年期にかけても、世代継承性の心理社会的適応機能は維持される

ことが指摘されている。小澤 (2013) は、世代間継承を世代継承性の中核と捉えて、世代間継承 (正の遺産の継承) 及び世代間緩衝 (負の遺産の継承の分断) に関する自己物語を語る高齢者に焦点を当て、前世代あるいは次世代との世代間関係に関する語りの構造を明らかにすることを試みている。研究の参加者に対して生涯にわたる家族のエピソードを自由に語ることを求めたところ、31 名中 9 名 (68~82 歳) が世代間継承あるいは世代間緩衝について語った。それらの語りから「世代間継承成立型 (3 名)」、「世代間継承半成立型 (3 名)」、「世代間緩衝半成立型 (3 名)」を抽出し、各類型の前世代及び次世代との世代間関係の性質を検討した結果から、自己物語の秩序化の構造について考察を行っている。すなわち、世代間継承の語りは自己経験に秩序をもたらしており、世代間緩衝の語りからは、不運な幼少期からの回復という救済のシーケンスとして、それ自体が心理社会的適応を促す機能を果たすことが示された。老年期の世代継承性に関する実証研究は未だ限られている。著者が述べるように、老年期の世代継承性の心理社会的適応機能を更に探索し、その全容を描き出すことができるならば、幸せな老いを考える上で重要な鍵となるのは間違いない。

一方、増井らの研究グループでは、85 歳以上の超高齢期のサクセスフル・エイジングを支える重要な概念として老年の超越に着目し、精力的な研究を進めている。老年の超越は、超高齢者が身体機能の低下や社会的ネットワークの縮小に伴う心理的危機を乗り越えて、心理的適応に至るための心理的な発達を示す。増井・中川・権藤・小川・石岡・立平・池邊・神出・新井・高橋 (2013) では、以前に発表した日本版老年の超越質問紙を精査し、改訂版 (Japanese Gerotranscendence Scale Revised: JGS-R) を作成して、妥当性と信頼性を検討している。対象は、4 ヶ所の地域から無作為抽出された地域高齢者 1,973 名 (70 歳群 1,000 名, 69~71 歳: 80 歳群 973 名, 79~81 歳) であった。確認的因子分析の結果、JGS-R として、「「ありがたさ」・「おかげ」の認識 (人のありがたさを実感している等)」、「内向性 (一人で過ごすのはつまらない: 反転項目)」、「二元論からの脱却 (私の気持ちは昔と今を行ったり来たりしている等)」、「宗教的もしくはスピリチュアルな態度 (死後の世界があると思う)」、「社会的自己からの脱却 (つい見栄を張ってしまう: 反転項目)」、「基本的で生得的な肯定感 (振り返ってみると、「自分はよくやってきた」と思う等)」、「利他性 (自分のことより人のことをまず考える等)」、「無為自然 (良いことも悪いことも、あまり考えない等)」の 8 因子 27 項目の尺度が構成さ

れた。また、海外の先行研究の結果と同様に、老年の超越は年齢と共に上昇すること、女性でその得点が高いことが示されたことから、高齢者、超高齢者の心理特性の生涯発達について、西欧と同様の枠組みで検討することが可能であり、本尺度の活用は、文化心理学的な見地、生涯発達心理学的な見地からも、重要な知見を提供する可能性が考察されている。一方、十分な内的一貫性が得られなかったことから、心理尺度を用いて老年の超越という幅広く複雑な現象を測定することの難しさも浮かび上がった。高齢化が進む一方で、超高齢者の約 4 割が要介護状態である現状を考慮すれば、身体機能や生活機能が低下した場合にも心理的に適応していく発達プロセスの解明は急務である。超高齢期の虚弱化の進行と心理的適応、老年の超越の役割を明らかにするために、今後の研究の展開が強く待たれる。

更に、竹村・仲 (2013) は、高齢期には体力の衰退、疾患、身近な他者の死亡など、自分では制御することのできない「統制困難な出来事」に直面する機会が多いことに着目し、「高齢者はどのように統制困難な出来事を対処しているのか」について、一次的コントロール (自己に合わせて状況を変化させる過程: PC) に比して、二次的コントロール (状況に応じて自己を変える過程: SC) の重要性を指摘している。SC に関する先行理論の精密な検討を行い、SC の中でも、統制困難な状況を受容し、状況に合わせるために自己を調整する働きをもつ、「調和焦点型 SC」の概念に着目し、高齢者の対処方略を明らかにすることを試みている。具体的には、本人が病気である、または家族の介護をしている 70~74 歳の高齢者 24 名に半構造化面接を行ったデータを用いて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行った。その結果、SC の高い高齢者は、(a)まず、体力や健康などの自己資源が低下し、理想とのバランスの崩壊を自覚すること、(b)多様な生き方に対する知識や理解があると、衰退を自律的に受容できること、(c)自己資源を現実的に査定することが大切という知識や理解があると、現在の目標や認知、行動を衰退に合わせて調整できること、(d)老いの受容や自己調整を維持するために、身近な人と交流し、気晴らしをして、忍耐強く統制困難な出来事と付き合っていること、が示された。人間には全ての出来事をコントロールすることはできない。しかしながら、長期にわたる人生を、統制困難な状況を乗り越えて適応していかなければならない。本研究において示された調和焦点型 SC の個人差は、統制困難な状況にいる

高齢者の体験を丁寧に分析することにより見出されたものであり、高齢期の適応、発達を規定する重要な因子であると考えられる。著者も述べているとおり、今後は、後期高齢者においても同様の SC 過程を示すのか、SC は心理的健康に貢献するのか等について、更なる研究の蓄積が期待される。

Well-being

中川・榎藤・増井・石岡・田淵・神出・池邊・新井・高橋 (2013) は、高齢期の生活の質 (QOL) の評価に関する先行研究を検討し、「これからも生きたい」というポジティブな評価とそれに伴うポジティブな感情を包含する包括的な心理的 well-being である Valuation of Life (VOL) に着目している。分析 1 では、4ヶ所の地域から無作為抽出された 69 歳から 71 歳の高齢者 1,000 名 (平均年齢 70.09 歳, $SD=0.88$) を対象に、VOL 尺度の因子構造と信頼性・妥当性を検討した。その結果、「ポジティブ VOL (今ある目標はかなう等)」, 「スピリチュアル well-being (信心や信念があるから、私は前向きな態度でいられる)」の 2 因子が抽出され、概ね許容される内的整合性が示された。基準関連妥当性の検討では、ポジティブ VOL が精神的健康と中程度の相関が見られたが、スピリチュアル well-being は弱い相関にとどまっている。更に、分析 2 では VOL の基本的な規定因子、分析 3 では VOL が主観的余命を規定するかについての検討も加えており、VOL は身体的要因 (外出頻度、IADL など) よりも社会的要因 (ソーシャルサポート、親友の有無など) に規定されること、VOL は独立して主観的余命を規定することが示唆されている。これらの充実した解析に加えて、考察では、日本人特有の VOL の規定因子、スピリチュアル well-being が独立した因子として抽出された背景や、後期高齢者の VOL の様相を明らかにする必要性などが議論されている。当該領域の後進の研究者にとって、非常に有意義な論文であった。

一方、豊島・佐藤 (2013) は、高齢者の孤独感が、他の年代とは質が異なる可能性に着目して、UCLA 孤独感尺度第 3 版の日本語版を作成し、ソーシャルサポート及び精神的健康との関連について検討している。分析の対象は 50~74 歳の中高年者 326 名 (平均年齢 66.54 歳, $SD=3.81$) であった。確認的因子分析の結果、原版と同様に、「ネガティブ (他人から孤立していると感じる等)」, 「ポジティブ (ほんとうに自分のことを理解してくれている人たちがいると感じる)」の 2 因子と、その上位概念として「global」を仮定するモデルが十分な適合を示した。しかしながら、年代 (中年期後期 50~64 歳, 前

期高齢期 65~74 歳) による孤独感得点の相違は認められなかった。更に、ソーシャルサポートの授受が孤独感を媒介として精神的健康に及ぼす影響を検討したところ、中年期後期、前期高齢期のモデルに差はなく、情緒的サポートの受領と提供は孤独感を低減させることにより、精神的健康に影響を及ぼすことが示された。先述の増井他 (2013) では、高齢期には内向性 (一人でいるのも悪くない等) の感覚が高まることが示されている。著者も問題意識を持っているとおり、高齢者の孤独感とそれ以前の孤独感には質的な相違があるのかどうか、孤独感の心理的意味にはどのような発達の变化があるのかどうかは、検討されるべき重要な課題である。本研究の対象はシニアカレッジに通う中高年者であったが、今後、対象者の属性を広げることにより、高齢者特有の孤独感の様相を明らかにすることが期待される。

虚弱な高齢者に対する介入効果

虚弱が進行した寝たきりや準寝たきりの高齢者に対する心理的支援の重要性が指摘されている。河合・新名・高橋 (2013) は、特別養護老人ホームの利用者を対象に、ライフレビューとライフストーリーブック作成のプログラムを行い、心理的 QOL に及ぼす効果を検証している。分析の対象は 71~95 歳の 22 名で、10 名を介入群 (平均年齢 79.7 歳, $SD=8.0$)、12 名を対照群 (平均年齢 83.8 歳, $SD=6.5$) として、プログラムの実施前後に介入効果を評価した。その結果、ネガティブ気分や精神的健康では、介入群が改善を示したのに対し、対照群では維持あるいは悪化する傾向が示された。また、自尊感情は、介入群は維持していたのに対して、対照群では悪化を示していた。ライフレビュープロセスに基づいたライフストーリーブックの作成が、虚弱の進行した高齢者の心理的 QOL を向上させる可能性が示されたことは、臨床的にも重要な示唆を与えるものであろう。著者は、学生、中高年者の聞き書きボランティアや傾聴ボランティアの導入や、介護保険外のサービスとして活用する等、実際に利用できるサービスとしての可能性にも触れており、今後の研究、実践の展開が求められる。

認知機能・知能

認知機能・知能は、成人期、老年期の QOL を支える重要な心理的要素であり、その発達プロセスの解明は急務である。本年は 4 編の論文があり、ストループ干渉の発達変化、記憶能力の加齢変化についての信念、知能の加齢変化の影響要因に関する研究成果が報告さ

れていた。

ストループ・逆ストループ干渉

従来、ストループ干渉は認知機能の様々な側面を測定する重要な指標として使用されてきた。特に、若年者よりも高齢者においてストループ干渉が強く現れるのは、抑制機能の加齢による低下を反映していることが指摘されている。松本・箱田・渡辺 (2012) は、このように、ストループ干渉に関して多くの研究がなされている一方で、逆ストループ干渉の発達研究が少ないことに着目し、ストループ反応と逆ストループ反応をマッチング反応という同じ様式で測定する新ストループ検査2を用いて、両ストループ干渉の発達変化を検討している。分析対象者は7～89歳の男女1,945名であり、4種類の課題(逆ストループ統制課題、逆ストループ干渉課題、ストループ統制課題、ストループ干渉課題)を施行した。その結果、高齢者において、ストループ干渉率は急激に増加する一方で、逆ストループ干渉率は18歳以上の青年・成人とほぼ変わらない水準を維持していることが示された。このようにストループ干渉と逆ストループ干渉が異なる発達変化を示すのは、異なる言語能力の発達と抑制過程を反映するからであり、逆ストループ干渉は老年期になっても低下しない言語的知識と関連する可能性が指摘されている。

記憶の生涯発達の一般的信念

加齢に伴い記憶力が低下していくことは多くの人が認めている。しかしながら、このような漠然とした記憶能力の加齢変化についての信念は、実証的には検討されていない。金城・清水 (2012) は、一般的な人たちの記憶能力に関する信念について検討している。アメリカで開発された「記憶に関する一般的記憶信念尺度 (General Belief about Memory Instrument: GBMI)」を邦訳し、若年者99名(平均年齢21.1歳, $SD=1.1$)、中年者97名(平均年齢45.5歳, $SD=3.7$)、高齢者104名(平均年齢68.1歳, $SD=2.5$)を対象に施行した。その際、先行研究に従い、一般的な成人の記憶能力の程度について、「非常に悪い」から「非常に良い」までの間の線分上の任意の位置に印をつけて回答する無段階の評定方法を用いた。生涯発達の視点から重要な結果は、高齢者が若年者・中年者よりも加齢による記憶の低下を、より遅い時期に生じると捉えていたことであろう。これは、アメリカ人を対象とする先行研究の結果と類似しており、高齢者の「ポジティブ優位性」と若年者の「ネガティブ優位性」の双方が影響している可能性が考察されている。一方、中年者の特徴は日米で異なっており、アメリカ人の中年者は高齢者のデータの曲線

に近く、日本人の中年者は若年者の曲線に近いことが示された。この結果から、アメリカ人に比して、日本人の場合には、高齢期に突入する精神的な準備のための時間や社会習慣が不十分である可能性が考察されている。

知能の加齢変化の影響要因

知能とは、「目的的に行動し、合理的に思考し、効率的に環境を処理する個人の総体的能力」である。高齢期の知能は、日常的な問題を解決したり、生産的な活動を行ったり、他者に助言したりする能力と関連する。また、知能を高く維持することは、心身状態の理解やそのマネジメントに関連し、結果として、健康や寿命にもポジティブな影響を及ぼす。従って、高齢者が知能を高く維持するための要因を検討することは、個人の生活の質の向上にとっても、活力のある高齢社会とするためにも有意義であると考えられる。西田らの研究グループでは、「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究 (NLS-LSA)」の2年間隔で行っている縦断調査の一環として、ウェクスラー成人知能検査改訂版の簡易実施法 (WAIS-R-SF) を施行すると同時に、様々な心理社会的特性に関する情報を収集している。西田・丹下・富田・安藤・下方 (2012a) では、NLS-LSAに参加した中高年者1,591名(平均年齢57.47歳, $SD=10.40$, 40～81歳)を対象に、新しい経験に挑戦することを好み、好奇心が強いというパーソナリティ特性である「経験への開放性」が知能の6年間の経年変化に及ぼす影響について検討を行った。その結果、経験への開放性が高い場合には、高齢になっても、結晶性知能を反映する一般的な事実に関する知識量を高く維持することができる可能性が示された。また、西田・丹下・富田・安藤・下方 (2012b) では、同じくNLS-LSAに参加した高齢者805名(平均年齢71.37歳, $SD=3.93$, 65～79歳)を対象に、抑うつがその後8年間の知能低下に及ぼす影響について検討した。その結果、高齢者の抑うつは、一般的な事実に関する知識量、論理的抽象的思考、情報処理速度の低下を引き起こす可能性が示された。以上の研究から、特に、好奇心旺盛に過ぎたり、抑うつを予防することが、高齢者の知能の維持に効果的である可能性が示唆されている。高齢者が知能を高く維持するための要因を検討することは、個人の生活の質の向上にとっても、活力のある高齢社会とするためにも有意義であると考えられる。今後は、学習効果や脱落効果も考慮に入れながら、更に、高齢期の知能を維持・向上に役立つ要因を明らかにし、それをサポートする取り組みについて考えてい

くことが求められる。

その他・学会発表

的場 (2012) は、『発達心理学研究』の特集号「貧しさと豊かさ：貧困から発達を考える」において、成人期及び老年期の貧困者支援に関する先駆的な展望論文を発表した。CiNii を利用して 2002 年～2011 年に発行された文献を検索し、成人期と老年期の貧困者支援に関する 88 編を整理すると共に、共通の論点として「支援に求められる家族的機能」、「貧困者支援におけるメンタルヘルスの課題」、「生涯発達における貧困の意味」に関する考察を行っている。特に、生涯発達の観点から貧困問題を捉える試みは興味深い。貧困による困難は現在だけにあるものではなく、「過去の積み重ね」の結果として現在に現れ、「未来への不安」として現在の中に存在する。従って、自分に合った生活や社会関係を自分自身の人生に再統合するプロセスは、生涯発達において重要な要素となり得ると指摘し、食料や住宅、就労先などの「不足した資源」を補うだけでなく、貧困の状態に至った人生の背景に目を向けながら、将来の生活を作り出していくという視点の必要性を強調している。著者は、自身が生涯発達についての十分な知見を持ち合わせていないと述べているが、発達心理学の分野で取り組むべき研究課題が明確に示されており、充実した内容の展望論文であった。

一方、学会発表では、親としての経験や子育てに関する研究が 4 件あり、幼児をもつ親の子育て意識 (大西・加藤・伊藤, 2013)、妊娠期から産後 24 ヶ月までの養護性の変化 (棚澤, 2013)、最近 10 年間の父親の育児意識と育児参加の変容 (寺見・藤本, 2013)、父親・母親のワーク・ライフ・バランスの状況が夫婦関係や家族機能に及ぼす影響 (福田・坂西・森下・尾形, 2013; 尾形・森下・坂西・福田, 2013) についての研究成果が発表された。また、成人期の適応を扱う研究は 3 件発表された。まず、山岸 (2013) は、青年期に測定された対人的要因と 17 年後の心理適応との関連を検討し、青年期の対人的枠組みが、17 年後の成人期の適応を予測することを示した。また、松岡 (2013) は、青年期から老年期にかけて、経験から学ぼうとする内省が、加齢肯定感や自尊感情とかかわる重要な視点であることを示唆した。一方、伏見・井森・岩冶 (2013) は、20 代から 40 代前半の成人女性のレジリエンスと時間的展望との関連を示した。更に、成人を対象とした、親の老いの認知に関する研究 (池田, 2013) も興味深い。成人期には、親の老いを認知することによって、親へのいたわり、親

の老いへの悲哀や拒否感情、これまでの振り返りと将来への不安などの気持ちが生じると共に、世代継承や親の死の意識といった、世代が移り変わっていく感覚も促されることが示されている。

おわりに

本稿では、2012 年 7 月から 2013 年 6 月末までに公開された『教育心理学研究』『心理学研究』『発達心理学研究』『老年社会科学』及び『日本教育心理学会第 55 回総会発論文集 (2013 年度)』における、成人期・老年期における発達研究を概観してきた。

これまでの『教育心理学年報』を追ってみると、たびたび成人期・老年期研究の少なさが指摘されている。本年も、子どもの発達研究などに比べると、論文の数は多くなかった。しかしながら、生涯発達研究における未開拓の領域や手薄だった部分に焦点を当てて、実証研究の第一歩を踏み出したという意味で、価値ある研究も多かったと感じる。例えば、最近まで本邦における夫婦の関係性への研究的関心の低さが危惧されてきた。しかし、本年は、昨今の熟年離婚の増加や夫婦間の独特のストレス状態等に着目して、夫婦の愛情関係やコミュニケーションを捉えようとする複数の研究成果が発表されていた。各研究において対象とするライフステージは異なっていたが、全体として概観すると (Figure 参照)、その関心は成人初期から高齢期を網羅している。コホートや時代の影響には慎重にならなければならないが、これらの研究を基盤とした今後の研究の展開は、日本の夫婦の関係性や、夫として、妻としての発達を明らかにするものと、大いに期待される。

また、高齢者の心的発達に関して、世代継承性、老年の超越、二次的コントロールなど、生涯発達理論の重要なキー概念の研究が進められていることも特筆に値する。これらは、我々がこれまで経験したことのない長寿命化した人生をどのように生きていくか、を追究する際の重要な枠組みを提供するものであった。昨年、文部科学省が設置した「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」の報告書が公開されている。サブタイトルは『人生 100 年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」』—今や、人生 80 年ならぬ、人生 100 年を見据える時代なのである。長寿国日本の高齢者心理学の果たす責務は、国際的に見ても大きい。ただし、研究対象の年齢範囲の拡大、超高齢者に対する精度の高い調査の工夫、生物学的加齢との相互作用の実証など、今後の研究に向けての共通した課題 (重

要かつ非常にハードである)も指摘されている。各々の研究者, 研究グループが積極的に論点を共有し, 現在, どのような知見が足りなくて, どういう方向で研究を進めると生産的なのか, 互いに呼応し合いながら研究を展開していくことが必要である。また, 人生後半期の発達, それまでの多様な経験の蓄積に大きな影響を受けている。複数の研究の報告から, 心理的発達の様相を統合することを目指す際には, それぞれの研究において, 対象がどのような集団の代表なのか(人口統計学的特性や健康状態, 居住地域等)を常に意識し, 成果の一般化可能性を明確に示しておくことが重要であることも指摘しておきたい。

筆者の視野の狭さから, 優れた論文が本稿から欠けていたり, 引用する際に著者の狙いや意図と異なる文脈に位置づけている場合には, どうかご容赦いただきたい。

引用文献

- 江上園子 (2013). 「母性愛」信奉傾向が夫婦関係と養育態度に与える影響—父親と母親の「母性愛」信奉傾向の交互作用に着目して— 教育心理学研究, **61**, 169-180. (Egami, S. (2013). Mothers' and fathers' adherence to "maternal love": Interactions with their marital satisfaction and parenting style. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **61**, 169-180.)
- 福田佳織・坂西友秀・森下葉子・尾形和男 (2013). 父親のワーク・ライフ・バランスと家族メンバーのストレス及び家族機能—中学生の家庭を対象として— 教心 **55**, 484.
- 伏見友里・井森澄江・岩冶まとか (2013). 成人期女性の適応力の発達(1) 教心 **55**, 367.
- 池田幸恭 (2013). 成人期を中心とした親の老いの認知によって生じる気持ちの探索的検討 教心 **55**, 366.
- 伊藤裕子・相良順子 (2012a). 愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討—中高年期夫婦を対象に— 心理学研究, **83**, 211-216. (Ito, Y., & Sagara, J. (2012). Reliability and validity of marital love scale in middle-aged and elderly couples. *Japanese Journal of Psychology*, **83**, 211-216.)
- 伊藤裕子・相良順子 (2012b). 定年後の夫婦関係と心理的健康の関連—現役世代との比較から— 家族心理学研究, **26**, 1-12. (Ito, Y., & Sagara, J. (2012b). The influence of marital relationship on psychological well-being in middle to old age period. *Japanese Journal of Family Psychology*, **26**, 1-12.)
- 金政祐司 (2012). 相互支援が関係満足度ならびに精神的健康に及ぼす影響についての青年期の恋愛関係と中年期の夫婦関係の共通性と差違 発達心理学研究, **23**, 298-309. (Kanemasa, Y. (2012). Commonalities and disparities between early adult romantic couples and middle-age couples in the effects of mutual support on relationship satisfaction and mental health. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **23**, 298-309.)
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み— 発達心理学研究, **5**, 72-83. (Kashiwagi, K., & Wakamatsu, M. (1994). "Becoming a parent" and personality development: A lifespan developmental view. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **5**, 72-83.)
- 河合千恵子・新名正弥・高橋龍太郎 (2013). 虚弱な高齢者を対象とした心理的QOL向上のためのライフレビューとライフストーリーブック作成プログラムの効果 老年社会科学, **35**, 39-48. (Kawaai, C., Shimmei, M., & Takahashi, R. (2013). Effects of a program aimed at compiling a life story book reflecting the life-review process on psychological well-being among the frail elderly. *Japanese journal of gerontology*, **35**, 39-48.)
- 金城 光・清水寛之 (2012). 記憶の生涯発達の一般的信念—一般的記憶信念尺度 GBMI による検討— 心理学研究, **83**, 419-429. (Kinjo, H., & Shimizu, H. (2012). Japanese adults' general beliefs about changes in the ability to remember from childhood to old age as measured by the General Beliefs about Memory Instrument (GBMI). *Japanese Journal of Psychology*, **83**, 419-429.)
- 榎澤令子 (2013). 妊娠期から産後24か月までの養護性 nurturance の変化—初産婦及び経産婦の縦断的調査— 教心 **55**, 370.
- 黒澤 泰・加藤道代 (2013). 夫婦間ストレス場面における関係焦点型コーピング尺度作成の試み 発達心理学研究, **24**, 66-76. (Kurosawa, T., & Kato, M. (2012). Development of a scale of relationship-focused coping for marital couple stress. *Japanese Journal of Developmental Psy-*

- chology, **24**, 66-76.)
- 増井幸恵・中川 威・榎藤恭之・小川まどか・石岡良子・立平起子・池邊一典・神出 計・新井康通・高橋龍太郎 (2013). 日本版老年の超越質問紙改訂版の妥当性および信頼性の検討 老年社会科学, **35**, 49-59. (Masui, Y., Nakagawa, T., Gondo, Y., Ogawa, M., Ishioka, Y., Tatsuhira, Y., Ikebe, K., Kamide, K., Arai, Y., & Takahashi, R. (2013). Validity and reliability of Japanese Gerotranscendence Scale Revised (JGS-R). *Japanese Journal of Gerontology*, **35**, 49-59.)
- 牧場由木 (2012). 成人期および老年期の貧困者支援—国内文献レビュー— 発達心理学研究, **23**, 450-459. (Matoba, Y. (2012). A literature review concerning social support for the poor in adulthood and old age in Japan. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **23**, 450-459.)
- 松本亜紀・箱田裕司・渡辺めぐみ (2012). マッチング反応を用いて測定したストロープ・逆ストロープ干渉の発達変化 心理学研究, **83**, 337-346. (Matsumoto, A., Hakoda, Y., & Watanabe, M. (2012). Life-span development of Stroop and reverse-Stroop interference measured using matching responses. *Japanese Journal of Psychology*, **83**, 337-346.)
- 松岡弥玲 (2013). 経験から学ぼうとする内省が加齢への肯定感, 自尊感情に与える影響—青年期から老年期までの横断的研究— 教心 **55**, 365.
- 宮本純子 (2013). 乳幼児をもつ母親の自己決定感が時間的展望と育児不安に及ぼす影響 心理学研究, **84**, 176-182. (Miyamoto, J. (2013). The effect of self-determination on time perspective and child-care anxiety. *Japanese Journal of Psychology*, **84**, 176-182.)
- 中川 威・榎藤恭之・増井幸恵・石岡良子・田渕 恵・神出 計・池邊一典・新井康通・高橋龍太郎 (2013). 日本語版 Valuation of Life (VOL) 尺度の作成 心理学研究, **84**, 37-46. (Nakagawa, T., Gondo, Y., Masui, Y., Ishioka, Y., Tabuchi, M., Kamide, K., Ikebe, K., Arai, Y., & Takahashi, R. (2013). Development of a Japanese version of the valuation of Life (VOL) scale. *Japanese Journal of Psychology*, **84**, 37-46.)
- 西田裕紀子・丹下智香子・富田真紀子・安藤富士子・下方浩史 (2012a). 中高年者の開放性が知能の経時変化に及ぼす影響—6年間の縦断的検討— 発達心理学研究, **23**, 276-286. (Nishita, Y., Tange, C., Tomida, M., Ando, F., & Shimokata, H. (2012). Openness and intellectual change among Japanese middle-aged and elderly adults : A Six-Year Longitudinal Study. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **23**, 276-286.)
- 西田裕紀子・丹下智香子・富田真紀子・安藤富士子・下方浩史 (2012b). 高齢者の抑うつはその後の知能低下を引き起こすか—8年間の縦断的検討— 老年社会科学, **34**, 370-381. (Nishita, Y., Tange, C., Tomida, M., Ando, F., & Shimokata, H. (2012). Do depressive symptoms cause intellectual decline among elderly? : An 8-year longitudinal study. *Japanese Journal of Gerontology*, **34**, 370-381.)
- 尾形和男・森下葉子・坂西友秀・福田佳織 (2013). 父親, 母親のワーク・ライフ・バランスと夫婦関係—中学生の家庭を対象として— 教心 **55**, 483.
- 大西美香子・加藤幸久・伊藤康児 (2013). 幼児をもつ親の子育て意識 教心 **55**, 364.
- 大野祥子 (2008). 育児期男性の生活スタイルの多様性—“稼ぎ手役割”にこだわらない新しい男性の出現— 家族心理学研究, **22**, 107-118. (Ohno, S. (2008). Emerging varieties of life style in married men : The new type of being free from “the only provider role”. *Japanese Journal of Family Psychology*, **22**, 107-118.)
- 大野祥子 (2012). 育児期男性にとっての家庭関与の意味—男性の生活スタイルの多様化に注目して— 発達心理学研究, **23**, 287-297. (Ohno, S. (2012). Men's commitment to family reconsidered : Focus on the diversity of life style as a work/life. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **23**, 287-297.)
- 大島聖美 (2013). 中年期母親の子育て体験による成長の構造—成功と失敗の主観的語りから— 発達心理学研究, **24**, 22-32. (Oshima, K. (2013). Middle-aged mothers' maturity process in their childcare experiences : Interviews regarding their successes and failures. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **24**, 22-32.)
- 小澤義雄 (2013). 老年期における世代間継承の認識を伴う自己物語の構造 発達心理学研究, **24**, 183-192. (Ozawa, Y. (2013). The structure of

- self-narratives, including recognition of inter-generational transmission in old age. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **24**, 183-192.)
- 竹村明子・仲 真紀子 (2013). 身体や健康の衰退に調和するための高齢者の対処—二次的コントロール理論を基に— 発達心理学研究, **24**, 160-170. (Takemura, A., & Naka, M. (2013). Fit-focused secondary control and coping strategies of older adults with declining health and physical strength. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **24**, 160-170.)
- 寺見陽子・藤本あゆみ (2013). 父親の育児意識の変容と育児参加度に関する研究—10年前との比較— 教心 **55**, 371.
- 豊島 彩・佐藤真一 (2013). 孤独感を媒体としたソーシャルサポートの授受と中高年者の精神的健康の関係—UCLA 孤独感尺度第3版を用いて— 老年社会科学, **35**, 29-38. (Toyoshima, A., & Sato, S. (2013). Relationship between social support and mental health mediated by loneliness among the middle-aged and elderly : An investigation using the UCLA Loneliness Scale Version 3. *Japanese Journal of Gerontology*, **35**, 29-38.)
- 山岸明子 (2013). 青年期の対人的要因は成人期の適応に影響するのか?—17年後の縦断的データによる分析— 教心 **55**, 368.
- 山根隆宏 (2012). 高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子供の障害の意味づけ—人生への意味づけと障害の捉え方との関連— 発達心理学研究 **23**, 145-157. (Yamane, T. (2012). The relationship between mothers' construction of the meaning of their children's high-functioning developmental disorders and view of the disability. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **23**, 145-157.)
- 山根隆宏 (2013). 発達障害児・者をもつ親のストレス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **83**, 556-565. (Yamane, Y. (2013). Developmental Disorder Parenting Stressor Index (DDPSI) : Reliability and validity. *Japanese Journal of Psychology*, **83**, 556-565.)